

沖縄県における潜水器漁業従事者を対象とした アンケート調査

垣花 脩* 松村 享吉** 仲宗根桂子**
花城久米夫** 湯佐 祚子** 奥田 佳朗**
渡辺 洋介*** 仲間 理*** 乗松 尋道***

我々は、沖縄県農林水産部漁政課の依頼により、潜水器を使用している漁業従事者を対象として、減圧症の講習会を行った。その際、彼等の潜水方法等に関するアンケート調査をも行い、その結果を得たので、ここに報告する。

目 的

沖縄県は減圧症の多発地域である。1982年までに246例もの減圧症患者が当院高気圧治療室にて治療を受けており、そのうち194例(78.9%)が漁業従事者である。我々は過去に何度も、新聞やテレビ等のマスコミを通して、減圧症の恐ろしさを訴え、潜水器を使用している者に対し、注意をうながしてきた。その結果、当院における来院患者は、1979年の68例をピークに、年々減少してきたが、昨年は52例と再び増加し、その効果はまだ十分とはいえない。減圧症患者の約8割を占める漁業従事者の潜水方法や、減圧症に関する知識レベルをよく理解し、今後の啓蒙活動に役立たせる目的から、調査を行った。

方 法

対象者は講習会に出席した漁業従事者で、減圧症の講習を始める前に、アンケート用紙を配布し、質問事項を説明しながら、記入させた。

結 果

回収例は135例、全員男性で、年齢は17歳から66歳までであった。使用する潜水器具は、スキューバが74例、簡易マスク式潜水器が29例、それらの併用が32例で、ヘルメット式潜水器を使用する者

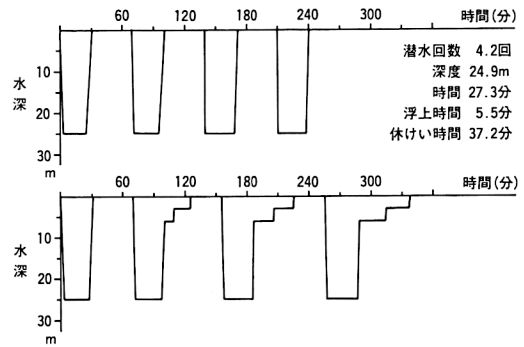


図1 追込み漁スキューバ

はいなかった。

水深10m以内で潜水作業を行うものはわずかに12例で、貝の採取やモズク養殖に従事しているが、残りの123例(91.1%)は、15m以上も深く潜水する追込み漁法や鉛突き漁法に従事しており、その潜水方法は、潜水深度・潜水時間の割に、浮上時間や休憩時間が十分でなかった。例えば、スキューバによる追込み漁法では、1日の潜水回数が平均4.2回、潜水深度24.9m、潜水時間27.3分、浮上時間5.5分、休憩時間37.2分となっており、それを図にしたのが図1(上)である。そのうち浮上時間以外を高気圧安全衛生規則の別表第2に照らし合せてみると、図1(下)の通り、2回目以降の潜水では、浮上する際、水深6mと3mとではしばらく滞在しなければならず、彼等の浮上時間があまりにも短いことから、無理な潜水作業を行っているのがわかる。潜水後、異常を感じた経験では図2のごとく、135例中105例(77.8%)が、経験があり、そのうち56例(53.3%)は手足が痛かったと訴え、次いで目まい・吐き気が36例

*琉球大学医学部附属病院高気圧治療室

**琉球大学医学部附属病院麻酔科

***琉球大学医学部附属病院理学療法部

次に減圧症に関する意識調査(図3)では、135例中129例(95.6%)が潜水病という言葉を知っているが、潜水病にかかるとどうなるかという質問には、129例中44例は回答がなく、85例が潜水病の症状について答えてくれた。手足が痛くなる、いわゆるベンズ型の症状を知っているものは71例であるが、これは全体135例の52.6%であった。また重症脊髄障害の症状である手足のマヒについて知っているのは、わずかに20例で、全体の14.8%にしかならない。これは潜水器漁業従事者の、減圧症に関する意識レベルの低さを示している。

また、減圧表という言葉を知っているのは、135例中87例(64.4%)であるが、残りの48例(35.6%)は知らないか、回答なしであった。従って、規則に準じた浮上の方法を知らずに、潜水を行なっているのが、約1/3程存在していたということで、彼等の潜水に関する知識が不十分であることがわかる。

ま と め

調査の結果、漁業従事者は、潜水に関する知識不足により、無理な潜水作業をくり返しており、脊髄型などの重症減圧症に関する認識が十分でないなどがわかった。その為、減圧症に関する認識を高め、より安全な潜水作業を行うよう、我々は彼等の潜水の実態をさらに正確に把握し、講習会などを通して、啓蒙活動をさらに一層強化しなければならない。

【参 考 文 献】

- 1) 湯佐祚子ほか：沖縄県における潜水夫減圧症について—琉球大学保健学部附属病院における治療症例一。日高圧医誌, 14(1): 81—83, 1979
- 2) 林 皓ほか：九州各県における潜水夫アンケート調査。日高圧医誌, 16(1): 1—3, 1981
- 3) 垣花 脩ほか：沖縄県における潜水夫減圧症患者の潜水パターンについて。日高圧医誌, 16(1): 22—24, 1981